広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	笑いにみられる子どもの構えの発達
Author(s)	吉本，桂子；中川，貴子
Citation	児童の言語生態研究 , 8 : 33 - 38
Issue Date	1977-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045090
Right	
Relation	

笑いにみられる子どもの構えの発達

吉本桂子・中川貴子

一、調査目的

笑いには、微笑、哄笑、冷笑、苦笑、うわべの笑い、泣き笑いなどさまざまの笑いがある。その多くは相手の人との心的な働きかけのある状況のもとに発生する。つまり、笑いは対人関係のあり方にかかわりがあるのである。あるいは、対物関係のあり方ともかかわりがあるともいえるであろう。

たとえば、あるマンガを読んで、笑う者と笑わない者、同じ笑うにしても、爆笑的に笑う者とせせら笑う者と千差万別である。個々の笑い方を聞いただけでも、それが誰であるかわかるぐらい、一人一人の笑いには癖があるのである。それぞれの笑いを聞き、ことばとしてとらえた時に、おのずとその笑いに含まれる意識を意識化するのである。つまり、さまざまな笑いのことばを人間が習得するということは、笑いに対する意識のもち方、すなわち、構えを習得することになる。

もちろん、その意識の修得のしかた、修得の段階は個々において、それぞれ違いがあるだろうし、それは、一般にいわれる性格とも何らかの関係があると思われる。

そこで、笑いにともなうことばを追求することによって子どもの構えがどのように変化し、発達していくか基礎的な資料を得、さらに、子どもの性格とのかかわりあいについても、みることができたらと思う。

二、調査方法

笑い方の種類をことばで探せば、大わらい、爆笑、高笑い、微笑、破顔、噴飯、嘲笑、冷笑、あざ笑い、せせら笑い、しのび笑い、ぬすみ笑い、失笑、にが笑い、てれ笑い、泣き笑いなどあげられるが、これらをふまえて、無作為に三十四項目の笑いをとり出して次のような調査を試みた。

(1) 調査Ⅰの問題

わらい方には、いろいろあります。次に書かれているわらいかたの中で、あなたがいちばんすきなわらい方には○を、一ばん、きらいなわらいかたには×をつけなさい。（○と×は一つずつです。）また、そのわらいかたがどうしてすきか、またどうしてきらいか、そのわけも書きなさい。

(2) 調査Ⅱの問題

あなたがわらう時は、どんな時ですか。その時、あなたはどんなふうに笑っていますか。自分でかけるだけ書いて下さい。

(3) 調査Ⅲの問題

あなたは次のような笑い方を聞いたり、みたりした時に、どんな事を思いうかべますか。二つをえらんで思いうかべることを書きなさい。

(4) 笑いの項目

(1)ハハハハハ　(2)ワッハハハ
(3)アハハハハ　(4)ウハハハハ
(5)アッハハハ　(6)ゲラゲラ
(7)ホホホホ　(8)オホホホ
(9)フフフフ　(10)ヘヘヘヘ
(11)ウフフフ　(12)エヘヘヘ
(13)フッフッフッ　(14)ヒヒヒヒ
(15)ケケケケ　(16)クスクス
(17)クックックッ　(18)ブッ
(19)ケタケタ　(20)イッヒヒ
(21)ウシシ　(22)ケラケラ
(23)ヘラヘラ　(24)ウシシウシ
(25)ブッ　(26)ウヒャー
(27)フフン　(28)ニッコリ
(29)ニコッ　(30)ニコニコ
(31)ニヤッ　(32)ニヤニヤ
(33)ニタニタ　(34)キャッキャッキャッ
（以上三十四項目）

三、調査の対象及び人数

(一) 調査Ⅰ

一年　東京　町田第三小
　　四谷小
横浜　大正小
計126名

二年　東京　町田第三小
　　四谷小
　　南海小
横浜　中山小
計136名

三年　東京　町田南四小
　　町田第二小
横浜　汐見台小
　　大正小
計137名

四年　東京　町田第四小
　　松ケ丘小
　　玉川小
計144名

五年　東京　藤野台小
　　ひのき小
横浜　保野小
計147名

六年　東京　相原小
横浜　汲沢小
　　大正小
計149名

(二) 調査Ⅱ

一年	東京	町田第三小			計74名
	横浜	大正小			
二年	東京	町田第三小			計84名
	横浜	中山小			
三年	東京	町田第二小			計72名
	横浜	汲見台小			
四年	東京	松ケ丘小			計70名
		町田第四小			
五年	東京	檜町小			計68名
	横浜	俱野小			
六年	横浜	大正小			計84名
合計	男41名、女32名、計73名				
六年	相原小	16	19	計35名	
	大正小	20	22	計42名	
	汲沢小	18	17	計35名	
合計	男54名、女58名、計112名				

(三) 調査Ⅲ

学年	調査校	男	女	計
一年	四谷第一	12	11	計23名
	聖徳小	13	11	計24名
	大正小	21	17	計38名
合計	男46名、女39名、計85名			
二年	四谷第一	18	12	計30名
	南海小	17	15	計32名
合計	男35名、女27名、計62名			
三年	町田南四	24	16	計40名
	大正小	20	18	計38名
	大正小	23	16	計39名
合計	男67名、女50名、計117名			
四年	町田第四	19	18	計37名
	玉川学小	14	21	計35名
	町田第四	19	18	計37名
合計	男52名、女57名、計109名			
五年	藤野台小	21	16	計37名
	藤野台小	20	16	計36名

(四) 実施期間

五十一年二月より五月まで。

(注) 調査1と調査2との関連、調査1と調査3との関連をみるために、調査1と調査2、調査1と調査3をそれぞれ一組にして調査した。

四、調査結果と考察

まず、調査一のAのグラフから、好きな笑い方の上位五つを取り上げてみると一年では、「ハハハハ・ゲラゲラ・オホホホ・ニコニコ・ニコッ」、二年では、「ハハハハ・オホホホ・ニコニコ・ワッハハハ・アハハハ」三年では、「アハハハ・ハハハハ・ワッハハハ・アッハハハ・フフフフ」、四年では、「ワッハハハ・アハハハ・ハハハハ・アッハハハ・ウフフフ」、五年では、「アハハハ・ハハハハ・ワッハハハ・アッハハハ・クスクス・ウヒャー(クスクス・ウヒャーとも四%)」、六年では、「アハハハ・ハハハハ・ワッハハハ・アッハハハ・ニッコリ」となっている。

これらを見て気づくことは、一年から六年まで「ハハハハ・ワッハハハ・アハハハ」など、爆笑的、大笑的な笑いを好む者が多く、その理由としては、調査一のBより、「元気が良い、明るい、活発、健康的、おもしろいから。」ということになる。

逆に、調査一のAから、嫌いな笑い方を見てみると、一年では、「ブッ・キャッキャ・ブッ・ゲラゲラ・ヒヒヒヒ」、二年では、「オホホホ・ブッ・キャッキャッ・ゲラゲラ・ブッ」、三年では、「ヒヒヒヒ・オホホホ・ブッ・ニタニタ・ブッ・イッヒヒ(ブッとイッヒヒとも五%)」、四年では、「オホホホ・ヒヒヒヒ・ケケケケ・イッヒヒ・ブッ・ニタニタ」、五年では、「オホホホ・ニタニタ・ゲラゲラ・ケケケケ・オホホホ」、六年では、「オホホホ・ニヤニヤ・ニタニタ・ウシシ・ニヤッ」となっている。

特に、嫌いな笑い方の筆頭に、二年以上は「オホホホ」を取り上げており、先の好きな笑い方に、一年、二年が「オホホホ」を選んでいることと比較するとおもしろい。二年では、「オホホホ」を好きとする者、十%、嫌いとする者、十三%と約同じであり、二年が「オホホホ」の好き嫌いの過渡期となっているようである。その理由を取り上げてみても低学年では、「オホホホ」は、かわいらしい女の子らしいと受けとめているのに対して、高学年では、教育ママ、上品ぶっている、お高い、金持ちのおばさんととらえている者が多く、これは、現在の受験中心の勉強、それに対する母親のイメージ、テレビなどの影響から来るものであろうか、低学年から高学年への推移がおもしろい。

また、嫌いな笑い方では、「ニタニタ・ニヤッ・ニヤニヤ」など、嘲笑、せせら笑う傾向のある者が多くなってきている。これらは先の爆笑や大笑を好む傾向が多いのに対して声を出さない、表情だけの笑いを嫌っているということでうなずける。

全体的に低学年では、好き嫌いの傾向が分散しているが、高学年になると、自分の好き嫌いの好みがはっきりしてくるようである。これは、低学年では、音からくる感覚を、他のものに置き換えて解釈しているが、高学年になると内容的に深く心情をとらえている。

一般に、好きな笑い方の率が高いものは、嫌いな笑い方の率も低く、嫌いな笑い方の率が高いものは、好きな笑い方の率も低いようである。また、同じ笑い方でも、「キャッキャ」のように低学年では、さるのようだから嫌いと感じているが、高学年になると、かわいらしいと変化してくるもの、「ブッ・ブッ」は、おならのようだと低学年に嫌われているのに対して、高学年では無視されている、この点に、低学

年では、音から感覚をとらえていることがわかり、低学年から高学年への成長がみられるようである。

次に、調査二の表を見てみよう。これは、どんな時に笑いたいかを自分で書けるだけ書いてもらい、それを四つの型に分類してみたものである。

A……形容詞で表わされているもの

B……「変な」ということばがついて表わされているもの

C……自分から何かをしたことを表わしているもの

D……他人が何かをしてそれを見た時、他人から何かをされたことを表わしているもの

特に、Bの型は、思い浮かべる中に「へんな～」というものがあり、子供の中にある「へんな～」とは、いったい何なのかを特にみて、笑いとどのような関係があるのかを考察するために特別に設けたものである。

この表では、二学年以上にそのイメージが浮かんだものを棒グラフに表わした。全体的には、高学年になるに従って、やはり、イメージも多くなり、それだけ、多くの構えを修得しているということがいえる。A型の「おもしろい時、おかしい時、楽しい時、嬉しい時」、C型の「マンガを読む時、テレビを見る時、ふざけた時、にらめっこをした時」、D型の「人にくすぐられた時、みんなが笑うと」などは、全学年に思い浮かぶものである。低学年が、語彙も少なく、いたずらをしたりくすぐられたりなど単純なことで笑うのに対して、高学年になると「思い出した時、一人で空想した時」など、何も対象がない場合の笑いもみられ、また、「自分だけができた時」「人がバカ笑いをする時」、「人が静かにしている時、人がわざと笑う時」など違った点がみられる。つまり、高学年になればなるほど対人関係が広くなり自分の感じとしてのみ受けとめるのではなく、常に彼我関係を意識している。そこでは単なる笑いだけでなく、他とのかかわりあいにおける自分の構えが生じ、その構えが笑いの中にみてとれると考えたからである。しかし、実際に調査してみると、笑いたい時の場面の数は、四年までは順調に広がるが、五年で落ちこみ、六年でまた広がるというようになった。特に、先に述べた、「へんな～」という時に笑いたいという者が四年生では非常に多く、また、項目も七つあって、いちばん多い。「へんなことを言う、へんなことをする。へんな顔、へんな声、へんな笑い方、へんなかっこう、へんなテレビ」などにまつわる「へんな」とはいったい何か。おそらく性的関心がそろそろ芽生え始め、テレビや本の影響、秘密に興味をもっているこの学年が、もやもやとした、どうにもならない気持ちをとらえ始めたからであると思われる。さすがに高学年になると、ぬすみ笑い、忍び笑い、失笑、苦笑など彼我関係を意識した傾向が目立ち始める。また、五年の落ちこみは、他学年が自分の構えを素直に出して回答したのに対し、回答以前に自分の構えをつくり、自分の構えをださなかったためではなかろうかと考える。

さて調査三であるが、この調査はいろいろな笑い方の音から、子供はどのようなイメージを浮かべるか調べたものである。調査三―A_1はどの笑い方に回答した者が多いかをグラフにあらわしたものである。（三十四種類あるため%が散らばったので五%以上のものを取りあげた。）またその下に示してあるイメージは、各学年で多く出たイメージと、注目すべきイメージをピックアップし（　）内にその学年名を示した。

A_2表の方は五%以下の笑いである。一番多いイメージも注目すべきイメージもA_1表と同様に列挙してみた。

これを見ると、A_1表で挙げられている笑いは調査一で笑い方の好き嫌いで%が多かったものが良し悪しに関係なくイメージとして浮かびやすいことがわかる。また、一番多いイメージの浮かび方と調査一で行なった好嫌の理由とが、ほとんど一致している。ただ、理由というときと、イメージとでは、その出方は少し違うように思える。理由のときは『……だから』と必ずつけることにより考えようとするし、イメージのときは自分の思いを広げる自由さが伴う。従って、イメージの方が理由のことばの出方よりも当然の事ながらおもしろい。これを注目すべきイメージで拾ってみたのであるが、表を見てもわかる様に、注目すべきイメージで、出しているのはほとんどが、四・五・六年である。これは、一・二・三年生ではまだ、理由とイメージとの区別があまりついていないということにもなると思う。

その一例をあげて見ると、一番多いイメージを拾ってみると、どれも音に引きずられている場合と、安易に場面を想定できる語が多い。だが、注目すべきイメージを拾ってみると、

ワッハハ（豊かな感じ）　3・5・6年

ハハハ　（明朗活発な人）　6年

アッハハ（負けそう）　4　年

ニッコリ（すがすがしい）　5　年

ニヤッ　（ぶ気味）　6年

と、笑いを感じて受け止めている語が多い。これはわけでは拾えなかった語であるし、笑いに伴う雰囲気をそろそろ音だけではなく、高学年はとらえはじめてきていることがわかる。

今まで述べてきた中で、子どもたち

が音に引きずられる段階と、雰囲気で笑いをとらえはじめてきている段階とを考えてきたが、ここにあげた笑いそのものに、もう異う要素があるように思う。そこで、左記の様に大ざっぱに区別して考えてみることにした。

A　音声を伴い自然発声的笑い
　ハハハ・アハハ・ワッハハ・アッハハ

B　音声を伴い、下品さが入る笑い
　ゲラゲラ・ケタケタ・ケラケラ・キャッキャッ

C　音声を伴い、意識して笑う笑い
　オホホホ・ヒヒヒヒ・イッヒヒ・フフフウフフ・ケケケケ・

D　音声を押し殺して笑う笑い
　クスクス・クックッ・ブッ・ブッ・フッフッフ・

E　音声のない笑い
　ウヒャー・ウシシ・ウシウシ・フフンヘラヘラ・ニッコリ・ニコッ・ニヤッニコニコ・ニヤニヤ・ニタニタ

こうして考えてみると、簡単にイメージが湧かないというのは、最後の音声を伴わない笑いである。A_1表でも、ほとんど注目すべきイメージがなかった。13語中5語だけである。しかし、この5語中2語には、その発達が見られるイメージがあった。

ニタニタ（笑っているかどうか＜2年＞）疑しい。（無理に笑っている＜2年＞）と音声のないことを気にしている段階から、（堂々としていない＜5年＞）（いやしい男の人＜5年＞）へと笑いから態度に移ってくる。「いやらしい」という語は子どもたちは口にするが、人品いやしいということまでは、なかなか考えないものである。だがニヤニヤという笑いにはどこか人をさげすむようなニュアンスがあると子どもたちは感じはじめているように思う。

ニヤッもそうである。ぶきみ＜6年＞→自信たっぷり＜6年＞→思い出し笑い＜6年＞と、その音を伴わずにいる笑いの声なき声にぶ気味さを、暑苦しい自信とを思い合わせられるのであろうと思える。伺い知れない、いや油断できないぞ、という感じが、ニヤッのそれには潜んでいると思いはじめてきているのが、五・六年の段階だろう。

先程、笑いをいくつかにわけてみた。音声の上品・下品・意識・音のあるなし、そうするとやはり笑いの集中は、Aの自然と考えられる大笑いになる。調査一の好嫌も、イメージもそうである。これは調査二でもわかる様に笑いは、〃おもしろさ〃を伴う笑いが一番子どもたちの基本になっていることからもうなずける。六才児～十二才児においては少くとも笑いにおいては健康的であるということである。

見落せないのはBの下品な笑いにも、ずいぶん票が集まっていることである。調査一の好悪でそれがはっきりしている。上品ぶるということばが出たが、必ずしも下品を子どもたちは嫌わない。かえって下品であることが笑いの対象にもなっているのである。調査二の「へんな」がその良い例である。また、他人の失敗を見ることのあの喜びようは、やはり下品さのなせるわざである。小学校の児童の実態はこの程度ということである。

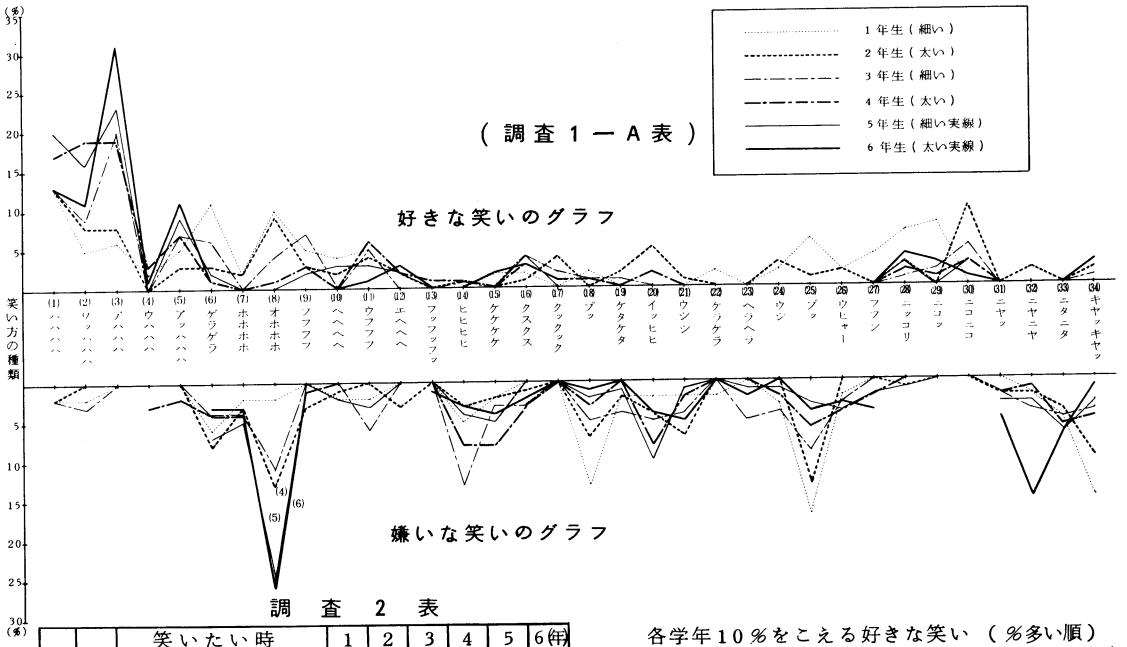
Cの押し殺す笑いになるとあまり票が集まらずにいる。これはしくまれたり、たくらみをもってしたりするので、ある程度思考を伴わせないと出来ない笑いだからだろう。中学年に多い笑いである。Dの意識して笑う笑い方も、中学年がトップである。

Eの声なき声については、もう述べたが、反応度は、調査一の嫌いに%に高いだけで、あとはほとんど、子どもたちに無視されている。これは音声を伴わないので、想定が、なかなか出来ず、高度になるのだろう。しかし先程も述べたように調査三のイメージの中では、高学年では、音声がないためにかえってそのイメージが自由で広がりやすく、おもしろいイメージが多く出ているのも、見のがせない。そうなるとこの種の笑いは、笑うという範囲だけではなく、その音から、形態をもイメージとしてとらえられるのだろう。「ヘラヘラ」は、いつも子どもたちがしているにもかかわらず、%が低い。これがその良い例である。またそれを感じとっている子はこの語に、「もやし」＜6年＞というイメージをつけている。

六年生位になるとそろそろその表面の声をききつけるだけでなく、その笑いの音声からくる感じ取り方が多種多様になってきていると思われる。この笑いの調査は、発達を追うというより、むしろ、自然感覚を見る結果になったといえよう。

このA～Eまでの笑いの区別、そして、その反応を見た結果、多方面にわたり、そのアンテナの伸びが違うことがわかった。そのアンテナの伸びを私たちは構えと呼んでいる。自然感覚をつきつめていくとその子の持っている構えが表われてくる。今回の調査はそこまではいかなかったが、子どもたちと笑いの音との関連が、これ程、多岐にわたるということと、それなりの感覚発達が見られたように思う。

（川崎・京町小教諭・吉本桂子）
（横浜・大正小教諭・中川貴子）



調　査　２　表

		笑いたい時	1	2	3	4	5	6(年)
A	わされて形容詞であらる	おもしろい時	―	―	―	―	―	―
		おかしい時	―	―	―	―	―	―
		楽しい時	―	―	―	―	―	―
		嬉しい時	―	―	―	―	―	―
		恥ずかしい時	―			―		―
		てれくさい時	―	―	―	―	―	―
B	変なということば	変なことを言った時		―	―	―		―
		変なことをした時		―	―	―	―	―
		変な顔をした時		―	―	―		―
		変な声		―		―		―
		変なことば		―				―
		変な笑い方		―	―	―		
		変なかっこう				―		
C	自分が何かをしたことを表わしているもの	マンガを読む時	―	―	―	―	―	―
		テレビを見る時	―	―	―	―	―	―
		本を読んでいる時		―	―	―	―	―
		遊んでいる時		―	―	―	―	―
		おもしろい絵を見て		―	―			
		おもしろい話を聞く		―	―	―	―	―
		おもしろい顔をする		―	―	―	―	―
		しゃれを聞いた時			―	―		
		まんざいを聞いた時			―			―
		冗談を言った時				―	―	―
		いたずらをした時	―	―		―	―	―
		人をおどかした時		―	―			―
		人をばかにした時	―					―
		人をからかった時	―					―
		人の物を隠した時				―	―	
		自分だけができた時					―	―
		おこる時		―				―
		くだらない時				―		―
		ふざけた時	―	―	―	―	―	―
		にらめっこをした時	―	―	―	―	―	―
		いいことをした時			―		―	―
		物を食べる時			―		―	―
		顔を合わせると			―	―		―
		おかしいことをする		―	―			
		２０面相を見た時			―	―		
		勉強の時			―		―	
		おしゃべりをする時				―		
		思い出した時				―		―
		一人で空想した時					―	―
		かくしごとをした時			―	―		

各学年１０％をこえる好きな笑い（％多い順）

	1　位	2　位	3　位
1 年	(1)ハハハハ		
2 年	(1)ハハハハ	(30)ニコニコ	
3 年	(3)アハハハ	(1)ハハハハ	
4 年	(2)ワッハハハ	(3)アハハハ	
5 年	(3)アハハハ	(1)ハハハハ	(2)ワッハハハ
6 年	(3)アハハハ	(1)ハハハハ	(2)ワッハハハ

各学年１０％をこえる嫌いな笑い（％多い順）

	1　位	2　位	3　位
1 年	(25)ウヒャー	(34)キャッキャッ	(18)ブッ
2 年	(25)ウヒャー	(8)オホホホ	(34)キャッキャッ
3 年	(14)ヒヒヒヒ	(8)オホホホ	
4 年	(8)オホホホ		
5 年	(8)オホホホ	(20)イッヒヒヒ	
6 年	(8)オホホホ	(32)ニヤニヤ	

		笑いたい時	1	2	3	4	5	6(年)
D	他人が何かをしてそれを見た時、他人から何かをされたことを表わしている	人がおならをした時	―	―	―	―	―	
		人がまちがえた時		―		―	―	―
		人がだまされた時		―	―	―	―	―
		人が失敗した時			―	―	―	―
		人が泣く時	―	―				―
		人がころんだ時		―		―	―	―
		人がバカをした時		―	―	―		
		人がずっこけた時			―		―	―
		いやらしい事を言う			―		―	―
		人がおこられると			―	―	―	
		おかしい事をした時		―	―			
		人が狂った時			―	―		―
		人がバカ笑いをする				―		―
		人が静かにしてる時				―		―
		人がわざと笑う時				―		―
		人にくすぐられた時	―	―	―	―	―	―
		みんなが笑うと	―	―	―	―	―	―
		人にほめられると			―	―		
		何かを買ってもらう			―		―	
		客が来た時					―	―

○ 第一位が5％以上を示すもの

調 査 3 ― A 表 (1)

実線は5％以上の回答率を表わす

年 (%)	(34) キャッキャッキャ	(8) オホホホ	(2) ワッハハハ	(6) ゲラゲラ	(1) ハハハハ	(26) ウヒヤー	(14) ヒヒヒヒ	(18) ブッ
1	(14)	(3)	(7)	(11)	(8)	(3)	(3)	(5)
2	(4)	(3)	(8)	(7)	(5)	(0.8)	(4)	(2)
3	(6)	(8)	(4)	(6)	(6)	(6)	(8)	(6)
4	(10)	(8)	(5)	(4)	(6)	(3)	(4)	(7)
5	(14)	(14)	(11)	(5)	(0)	(10)	(1)	(1)
6	(12)	(16)	(11)	(4)	(4)	(3)	(5)	(2)
1番目に多いイメージ	サル・小さい子	上品ぶっている	おもしろいとき・ばかみたい	おもしろい・バカ	おもしろい・怪人二十面相	バカみたい	おばけ	おなら・笑いをがまんしきれない
注目すべきイメージ	はしゃぐ(4) ばからしい(4・6)	自慢(5・6)	おなかをかかえる(6) 悩みがない (6) 量かなかんじ(3・5・6)	下品な笑い(4・6) 何んでそんなにおかしいの(5) わざとわらっている(6) 図々しい(6)	ざまあみろ(4) 明朗活発な人(6)		人を軽蔑 (5)	だまされたのに気づかない(4) 無理にわらっている(6)

年 (%)	(21) ウシシ	(25) ブッ	(32) ニヤニヤ	(10) ヘヘヘヘ	(15) ケケケケ	(30) ニコニコ	(19) ケタケタ
1	(4)	(6)	(2)	(0.6)	(1)	(1)	(5)
2	(7)	(7)	(5)	(6)	(0)	(5)	(2)
3	(3)	(2)	(2)	(3)	(3)	(2)	(2)
4	(3)	(2)	(3)	(2)	(2)	(2)	(0.9)
5	(1)	(1)	(1)	(4)	(5)	(0)	(1)
6	(2)	(2)	(6)	(2)	(5)	(3)	(0.4)
1番目に多いイメージ	いたずら・わなにかかったとき	おなら	あやしい	たくらんでいる	カエル・きもちわるい	うれしそう	変なわらい方
注目すべきイメージ			ひみつ(2) 人のうわさ(6)		からかう(6)		

○ 第一位が5％以下のもの(2)

番号	笑い	一番多いイメージ		注目スベキイメージ
(20)	イッヒヒ	たくらんでいる	(1 5・6)	顔つきがわるい(2) 目つきがこわい(2) 人を軽蔑(5) 気ちがいじみている(5)
(5)	アッハハハ	おもしろいこと	(3・4 6)	まけそうなかんじ(4)
(3)	アハハハ	おもしろい	(1・2・3・4 6)	バカにする(6)
	ホホホホ	上 品	(3・4 6)	素直にわらっている(1) 気味がわるい(6)
(33)	ニタニタ	気持がわるい	(2 4・5)	笑っているかどうか(2) 無理にわらっている(2) 堂々としていない(5)
		いやらしい	(4・5・6)	いやしい男の人(5)
(20)	エヘヘ	いたずら	(4・5・6)	小さい子のわらい方(6)
(19)	ケタケタ	変なわらい方	(1 3)	あほらしい(4) 笑い上戸(6)
(6)	クスクス	かくれてわらう	(3・4 6)	何かあるみたい(4)
(28)	ニッコリ	かわいい	(5・6)	すがすがしい(5)
(9)	フフフフ	泥 棒	(3・4)	
(11)	ウフフフ	上 品	(3 6)	
(31)	ニヤッ	ね こ	(2・3)	ぶきみ(6) 自信たっぷり(6) 思い出しわらい(6)
(27)	フフン	上品ぶっている	(1・2)	つんとしている(6)
(24)	ウシウシ	牛	(1 3・4・5・6)	
(29)	ニコッ	変なわらい方	(1)	
(22)	ケラケラ	かえる	(1 4)	
(17)	クックックッ	おとなしい	(3)	わらいたくてもわらえない(6)
(13)	フッフッフッ	ころぶ	(2)	
(23)	ヘラヘラ	本当におかしいのか	(3)	もやし(6)
(4)	ウハハ	おかしい	(3)	

3年以上出ているわけを好き嫌いにわけて示す

	好きなわけ					
1	おもしろい	(1)○ハハハハ	(3)○アハハハ	(10)○ヘヘヘヘ	(21)ウシシシ	(22)ケラケラ
2	かわいい	(11)ウフフフ	(28)ニッコリ	(30)○ニコニコ●		
3	楽しい	(2)○ワッハハ	(3)○アハハハ	(5)アッハハ		
4	上 品	(8)オホホホ				
5	気持良い	(3)○アハハハ				
6	思いきってわらえる	(3)○アハハハ				
	嫌いなわけ					
1	いやらしい	(33)ニタニタ				
2	気持わるい	(7)ホホホホ	(8)○オホホホ	(15)ケケケケ	(32)○ニヤニヤ	(34)○キャッキャッ
3	おならのようだから	(18)○ブッ	(25)○ブッ			
4	上品すぎる	(8)○オホホホ				
5	下 品	(6)ゲラゲラ				
6	女の大人	(9)フフフフ				

(○印のついているのはA表で、10％以上のもの)